



## 成熟した組織を土台に

「外資系企業で働いてきたが、具体的なキャリア目標として、カントリーマネジャーを意識したことはなかった。地道に目の前の仕

## 「二」はシュンク」増やす

シュンク・ジャパン 関谷 行矩 ハセキヤ・ゆきのりさん

### Profile

2007年工学院大学工学部卒。15年コグネックス、20年Arithmer（アリスマー）などを経て、22年シュンク・ジャパン入社。26年1月グローバルキーアカウントマネジメント&ビジネスディベロップメント部長、同年7月より現職。1984年東京都出身の41歳。

事に向き合ってきた結果」と誠実に話すのは、今年7月に就任したシュンク・ジャパンの関谷行矩社長。「そんな私に、しかも、こんなに早く出番が来るとは思ってもみなかった」とも明かす。

星野泰宏前社長は外資系ロボットメーカーの日本人などの社長を渡り歩いた人物。2021年にシュンク・ジャパンに入社して社長に就くと、社内体制を整え、業界での地位も固めた。

関谷社長も翌22年に入社し、そのかじ取りを間近で見てきた。「社風が変わり、社員が自身の強みを発揮できる環境に成熟する中で、バトンを引き継いだ。その基盤を生かしてビジネスを加速させたい」と意気込む。

### 日本市場で果たす役割

シュンクは工作機械用のクランプ装置やロボットハンドなど「つかむ」製品や技術に強みを持ち、国内でもエンドユーザーを中心に信頼を得る。関谷社長は機械系商社での営業経験もあり、その頃から顧客の熱を直接感じてきた。

一方、エンドユーザー向けの販売手法だけでは単発の案件が多く、業績が不安定になりやすい。そこで、安定的な事業基盤の構築のために、工作機械への標準採用や、ロボットシステムインテグレーター（Sier）との連携強化を狙う。

そのためには「シュンクならではの強み」の訴求が重要とみる。中でも自信を持つ領域が、工作機械へのワークの付け替え、いわゆる「マシンテンディング」だ。同社にはクランプ装置にもロボットハンドにも、長年の知見がある。ワークを把持するソリューションをワンストップで提供できる。

国内には海外市場を得意とする工作機械メーカーも多い。シュンクも世界中に拠点があり、サービス網の広さも強みとなる。

それ以外にも、日本法人の本社にあるテストルームでの把持テストを通じ、国内の市場ニーズをいち早く把握したい考えだ。

「『この分野なら、この工程なら、やはりシュンク』とのポジションを確立したい」と力を込める。国内での実績が今以上に広がれば、シュンクのグローバル内で日本法人の存在感が上がり、日本へのさらなる投資を呼び込めると見込む。「結果、顧客により良い製品やサービスを提供できると信じている。それが日本という重要な市場に拠点を置く意義」と話す。

（西塚将喜）